様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ５ 月 ２９ 日現在

機関番号：３４５０４
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ１６８５２

研究課題名（和文）英語史における名詞句内修飾要素の発達に関する実証的・理論的研究

研究課題名（英文）An Empirical and Theoretical Study on the Development of Adnominal Modifiers in the History of English

研究代表者
茨木　正志郎（IBARAKI, Seishirou）

関西学院大学・人間福祉学部・准教授

研究者番号：３０６４７０４５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、英語史における名詞句内修飾要素、特に、形容詞の振る舞いについて調査し、その調査結果に基づいて、古英語と現代英語の名詞句構造の発達について説明を試みた。まず、コーパス調査より、現代英語では名詞前位位置に制限される限定解釈の形容詞も、古英語では名詞後位位置に現れることを明らかにした。そして、古英語に見られた後置修飾形容詞の消失は、名詞句構造における主要部移動の消失と関連付けて説明することを提案した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究では、史的コーパスを用いて、古英語における名詞修飾形容詞の種類や分布について明らかにし、さらに、コーパスより浮かび上がった事実に対して、言語理論を用いて説明を試みた。このような研究は、言語事実の発掘という実証面と、言語理論を用いた説明という理論面を有機的に融合させた研究である。

研究成果の概要（英文）：This project has investigated the distribution of adnominal adjectives in Old English(OE) noun phrases and attempted to give a principled account for the development of the structure of noun phrases in the history of English. From the data collected by using historical corpora, it has been found that there were various kinds of OE adnominal adjectives which have the attributive interpretation and modify its head noun postnominally. Moreover, the loss of postnominal adjectives observed in OE has been argued to be related to the loss of the head movement within noun phrases.

研究分野：英語学

キーワード：名詞修飾形容詞　名詞句　主要部移動

## １．研究開始当初の背景

古英語と現代英語の文法における重要な違いの 1 つに、文・節における名詞や動詞などの語順の柔軟性があげられる。同様に、古英語の名詞句においても、語順に柔軟性があることが先行研究によってしばしば指摘される。名詞句内修飾要素の中でもとりわけ注目に値するのが形容詞の振る舞いであり、形容詞の名詞句内で現れる位置は比較的自由で、主要部名詞に先行することもあれば、後続することも可能であった。対照的に、現代英語では、補部を伴う形容詞(=(1))や不定代名詞(=(2))などを除けば、名詞修飾形容詞の現れる位置は主要部名詞に先行するのが通例である。

(1) an actor suitable for the part
(2) something bad / nothing wrong

このように、古英語と現代英語において、名詞修飾形容詞には統語上の振る舞いに違いがあることが指摘されてきた。

また、名詞修飾形容詞の統語位置と解釈の関係について、現代英語では、主要部名詞に後続する形容詞は叙述(predicative)の解釈を持つものに限られ(=(3))、限定(attributive)の解釈を持つ形容詞がその位置に現れることはできない(=(4))。

(3) any man *alive* / the remedies *available*
(4) *a girl *pretty* / *movies *popular*

しかしながら、古英語における(3)(4)で観察される統語位置と解釈の関係について、これまでそれほど議論がなされてこなかった。さらに、形容詞の統語や意味を考える際には屈折も考慮する必要がある。

このように、古英語の形容詞を扱う際には、統語・意味・屈折といった多くの考えるべき側面があり、これが当該の議論を複雑にしているように思われる。本研究では、これらの側面を 1 つ 1 つ整理し、形容詞の名詞句内における振る舞いを明らかにすることで、現代英語と古英語の名詞句構造の違いと、さらには名詞句構造の発達を明らかにしたい。

## ２．研究の目的

本研究の目的は以下の 2 点である。まず、古英語における名詞修飾形容詞の分布について、史的コーパスを用いて調査し、古英語の形容詞の振る舞いを明らかにすることである。管見の限り、これまで古英語の形容詞についてコーパスを用いた徹底的な調査は行われておらず、本研究は言語事実の発掘という貢献がある。また、得られたデータを先行研究で言われている内容と比較・検討も行う。もう 1 つの目的として、コーパスより得られた言語事実に対して、生成文法に基づく理論を用いて説明を与えることである。

## ３．研究の方法

本研究では、古英語のコーパス York-Toronto-Helsinki Parsed Corpus of Old English (YCOE)を用いて、名修飾形容詞の統語位置と強/弱屈折、意味について調査分析を行う。YCOE とは、生成文法理論に基づいて詳細に構文分析されたテキストを統語構造と共に検索できるコーパスである。ここでは、特に、古英語で多く観察された主要部名詞に後続する形容詞に注目して調査を行い、どのような種類の形容詞が名詞後位に現れているかを明らかにする。さらに、それらの形容詞について、現代英語の形容詞と比較しながら、どのような特徴があるのかを、意味と屈折の観点から考察する。

さらに、名詞修飾形容詞を扱った先行研究である Fischer (2000, 2001)や Haumann (2010)らの主張と、本研究での調査結果とを比較し、古英語と現代英語の形容詞の振る舞いの違いに説明を与える。Haumann (2010)では名詞句内における移動を用いて古英語と現代英語の形容詞の振る舞いに説明を与えているが、ここでのコーパス調査によって得られた言語事実も説明可能か検討し、必要があれば修正を加え代案を提案する。

## ４．研究成果

Fischer (2000, 2001)は、古英語の形容詞の屈折の強弱がその解釈と関係があると仮定し、強屈折であれば叙述(predicative)の解釈を、弱屈折であれば限定(attributive)の解釈を持つと主張している。一方、Haumann (2010)は、名詞前位の形容詞は限定的で、名詞に後続していれば叙述的であると主張している。そこで、史的コーパスを用いて、主要部名詞に後続する形容詞の統語位置と屈折、解釈について調査分析を行った。

YCOE を用いて主要部名詞に後続する名詞修飾形容詞の分布を調査し、Table 1 に示す結果を得た。

Table 1. Adnominal Adjectives in Postnominal Position

| *full* | *-weard* | *self* | other types | exceptional | attributive or predicative | TOTAL |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 211 | 141 | 138 | 46 | 9 | 233 | 778 |

Table 1 より、様々な種類の形容詞が名詞後位に現れることが分かった。例外(exceptional)の 9 例は形容詞が後続している名詞は属格であるので、ここでの分析対象から除外した。

まず、*full* が最もよく観察された形容詞の事例で、778 例中 211 例を占めた。これらのほと

んどの事例では、形容詞は属格名詞句を補部として持っている。しかしならが、211 例中 16 例が、*full* 単独で主要部名詞に後続しており、これは現代英語には見られない分布である。

次に、141 例観察された-*weard* を語の一部として持つ形容詞について考察を行った。-*weard* は、*upweard* “upward”や *innerweard* “inner”のように、方向や部分を表すことができる。inner のように、現代英語では名詞前位に現れるものが、古英語において名詞後位に現れていたことが明らかになった。

3 番目に多かった形容詞は *self* で、138 例観察された。Quirk et al.(1985)によれば、現代英語では *oneself* が強調の効果を引き出すために使われることがあるが(I met the manager himself)、ここでの *self* は、この強調用法と同じであると考えられる。

最後に限定(attributive)か叙述(predicative)の解釈を持つ 233 例の中には、限定の解釈を持ち強屈折を示す多くの事例が観察された。そのうちのいくつかを(5)に示す。

(5) a. ænne heafodbeag gyldenne (coboeth,Bo:37.112.20.2222)
one crown golden
b. hæwenne clað wyllenne (colaece,Lch_II¥[3]:46.1.1.3966)
blue cloth woolen
c. heora handa weorce dæghwamlice (cochdrul,ChrodR_1:17.22)
their hands work daily

(5a)の *gyldenne* “golden”は限定的解釈を持つ。すなわち、golden は王冠の本来的持続的意味を表し、他の王冠と区別する修飾要素である。また、(5b,c)の *wyllenne* “woolen”と *dæghwamlice* “daily”は、現代英語では限定の解釈しか持たない形容詞である。これらの形容詞は強屈折を示していることにも注意されたい。(5)に見られるタイプの形容詞は 233 例中 154 例で、84 種類を確認することが出来た。そのうちのいくつかを(6)に示す。

(6) *þynne*“thin” *brad*“broad” *finiht*“finny” *unscilliht*“unshelled” *gimmisc*“geweled” *gylden*“golden” *heah*“high” *Englisc*“English” *Frencisc*“French” *willisc*“foreign” *yfel*“evil” *halig*“sacred” *god*“good” *geong*“young” *linen*“flaxen” *wyllen*“woolen”

ここでのコーパス調査より得られた事実は、Fischer (2000, 2001)や Haumann (2010)らの反例になる。すなわち、強屈折で名詞後位に現れていても、限定の解釈を持つ形容詞が多く確認され、先行研究が主張するような屈折や統語位置だけで名詞修飾形容詞の振る舞いは単純ではないことを示した。また、古英語において様々な種類の限定形容詞が名詞後位に現れることができることを明らかにした。

ここまでで明らかになった古英語と現代英語の名詞修飾形容詞の分布の違いに関して、名詞句内の主要部移動と関連付けて説明することを提案した。具体的には、古英語では名詞主要部が形容詞を飛び越えて上の機能範疇まで移動していたが、現代英語までにそのような主要部移動は消失し、その結果、多くの名詞修飾形容詞は名詞前位に現れるようになったということである。

## ５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 4 件）


1. IBARAKI, Seishirou (2019) “A Corpus-Based Study of Adnominal Adjectives in Old English” *Language and Culture* Vol.22, 15-31, Kwansei Gakuin University Language Center.
2. 茨木正志郎 (2018)「中英語における二重属格の出現と発達について」 *Human Welfare* 10 巻, 139-148.
3. 茨木正志郎 (2017)「二重決定詞の消失と限定詞の文法化について」『日本英文学会第 89 回大会 Proceedings』, 131-132.
4. 茨木正志郎 (2016)「名詞修飾形容詞の歴史的変遷について」*JELS* 33, 24-30.


〔学会発表〕（計 5 件）

１．茨木正志郎「英語史における後置属格の出現について」　東北大学大学院情報科学研究科「言語変化・変異研究ユニット」主催第 5 回ワークショップ　2019 年 3 月 22 日　東北大学

２．茨木正志郎「英語の限定システムの発達について–後置属格の出現・発達の観点から」　史的英語学研究会第 5 回大会　2018 年 8 月 17 日　弘前大学

３．茨木正志郎「二重属格の出現と発達について」　名古屋大学英文学会第 57 回大会シンポジウム　2018 年 4 月 21 日　名古屋大学

４．茨木正志郎「形容詞の統語位置の変遷について」　史的英語学研究会第 3 回大会　2016 年 8 月 18 日　島根大学

５．茨木正志郎「二重限定の消失と限定詞の文法化について」　日本英文学会北海道支部第 61 回大会　2016 年 10 月 29 日　北海道教育大学旭川校

〔図書〕（計　0　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。